高等学校

平　成　11　年　度

教育研究員研究報告書

家　　庭

東京都教育委員会

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 1
Ⅱ　研究の内容 …… 2
　1　実態調査 …… 2
　　(1)　調査のねらい …… 2
　　(2)　アンケート実施に当たって …… 2
　　(3)　調査結果 …… 2
　　(4)　調査のまとめ …… 5
　2　研究の方向性 …… 5
　3　研究の進め方 …… 7
Ⅲ　指導事例 …… 9
　1　指導事例１　手紙や被服製作を通して自治会（老人会）との交流を図る …… 9
　2　指導事例２　衣生活と社会とのかかわりを知り、自立した衣生活を営む力を身に付ける …… 12
　3　指導事例３　家庭や地域のごみ問題を考える …… 16
　4　指導事例４　保育園実習を通して地域との交流を深める …… 20
Ⅳ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

平成11年度

教育研究員名簿

学校名	氏名
都立大学附属高等学校	近藤悦子
都立鷺宮高等学校	稲垣麻子
都立光丘高等学校	村上伸代
都立池袋商業高等学校	渡邉志織
都立東村山西高等学校	柄木田恵美子

担当　指導部高等学校教育指導課指導主事　　望月昌代

研究主題　家庭や地域での体験を通して、人とのかかわり合いを深める家庭科の指導

Ⅰ　主題設定の理由

「不登校」「いじめ」「キレる」など、最近の学校現場で起こる様々な問題を見てみると、多くの事例に共通するのは、子どもたちの対人関係が未熟であることに起因する場合が多いということである。「相手の気持ちが分からない」、「自分の感情をコントロールできない」といった自己中心的な行動がいじめや暴力に直接結び付いている例は少なくない。同時に、周囲にいる子どもたちも「他者」に積極的にかかわり、問題を処理するすべを知らないという実態があると考えられる。

本来ならば、他人を思いやる気持ちや自分の行動を規制する力は、幼児期からのしつけやきょうだい・友達・近隣の人々とのかかわりの中で、経験を通して身に付けていくものである。ところが、近年の社会の急速な変化は、家族の形態や地域とのつながりにまで変化をもたらした。経済的に豊かになったことで、子どもたちは我慢や不足感を味わうことなく生活し、働くことはもちろん家事の手伝いをする機会さえも減少した。「遊び」の内容も、かつての戸外の集団でのものから、部屋の中で一人でできるゲームなどに変化した。まして核家族が一般化し、きょうだいの数が減少した現代では、家の中で人間関係にもまれることも少なくなった。学校現場で起こる事件の背景に多く見られる「希薄な人間関係」や「アイデンティティの未発達」といった問題は、こうした現代の生活スタイルの変化によるものが大きいと考えられる。

この「コミュニケーション不全」の影響は、何も特別な問題にだけ見られる傾向ではない。家庭科の授業中でも、調理実習の班の中でうまく協力して作業することができないといった状況が見られるようになった。中には、人間関係のあつれきが原因となって休んでしまう生徒も出ている。コンビニエンスストアや自動販売機の普及で、欲しいものはいつでも簡単に手に入る時代に育った今の高校生は、「今すぐに」分かり合える、価値観の同じ仲間を求める傾向が強い。従って、理解するのに時間がかかる「異質の他者」とはコミュニケーションを拒否し、排除しようとする意識が生まれやすい。また仲間同士の付き合いでも、互いに傷つくことを恐れ、携帯電話やＥメールのようなメディアを介した付き合い方が増えているようだ。

今回の学習指導要領の改善のねらいにもあげられた「豊かな人間性や社会性の育成」という視点は、こうした社会の変化を背景に、豊かな人間関係を持てる子どもたちを育てていく教育の必要性を示している。そのためには、様々な生活体験を通し、多くの人々と触れ合う中で「人とのかかわり方」を学び、深められるような環境を教育の現場にも積極的に取り入れていくことが求められる。

このような観点から、研究主題として「家庭や地域での体験を通して、人とのかかわり合いを深める家庭科の指導」とし、体験学習やグループ作業を伴うことの多い家庭科の授業をきっかけとして、人とのかかわり方や自分と社会との結び付きの大切さに気付き、深めていくための指導事例を中心に、その指導方法等について研究を行った。

Ⅱ　研究の内容

1　実態調査

(1)　調査のねらい

意図的・計画的に人とのかかわりを深める体験の機会を提供するために、生徒の実態を把握する必要性を感じ、アンケート調査を行った。調査内容は、コミュニケーションの手段や現時点での能力、友人・家庭・地域の人々との交流状況について、11項目の択一式アンケートを作成し、都立高校５校の２年生を対象に平成11年６月から７月にかけて実施した。467名の回答を得て、授業計画を立てる上での参考とした。

(2)　アンケート実施に当たって

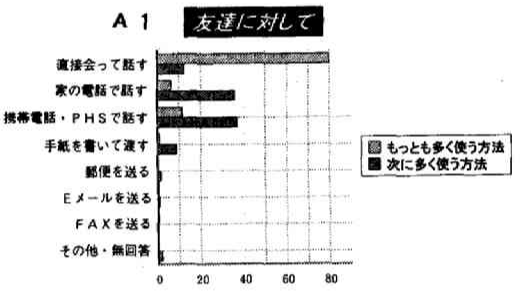
人のかかわりに関する実態調査は、ここ数年各方面で行われており、サンプル数・内容ともに充実したものが多い。従って、本研究で行った調査と関連するものを合わせて、高校生の実態を知る手がかりとした。参考にした調査は以下の通りである。

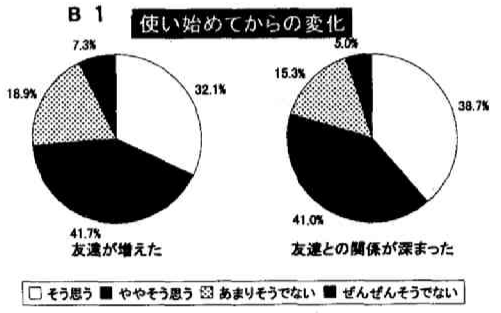
調査Ａ『コミュニケーションに関する実態調査』（本研究調査）	平成11年６月
調査Ｂ『高校生の他者感覚』（ベネッセコーポレーション）	平成10年10月
調査Ｃ『第６回世界青年意識調査』（総務庁青少年対策本部）	平成10年２月
調査Ｄ『第３回情報化社会と青少年に関する調査』（総務庁青少年対策本部）	平成８年６月

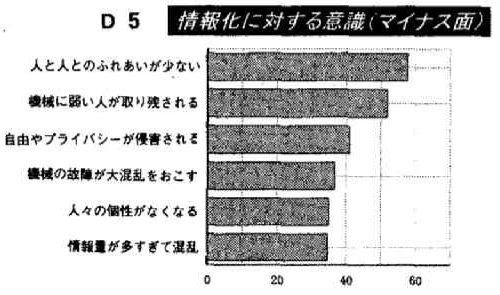
(3)　調査結果

ア　コミュニケーションの手段と情報化について

『これからの情報伝達手段としては携帯電話等の利用がますます増加する。』







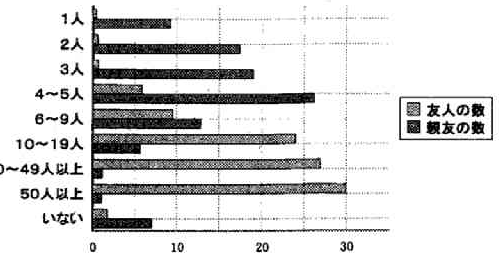
友人・家族・地域の人とかかわる手段として一番多いのは「直接会う」という結果となっているが、携帯電話等の利用は着実に増加している（Ａ１）。若者たちは、この道具を単なる伝達手段としてだけでなく、精神的なつながりを持つためのもの、つまり「所持することで友人関係が深まる」ととらえている（Ｂ１）。したがって、それを持たないということは、最も有効なコミュニケーション手段を失い、ますます希薄な人間関係に陥ることになりかねないと感じている。反面、このような情報伝達をマイナス面にあげている者も６割近くいる（Ｄ５）。

「今」話をする、「すぐ」思いを伝えることが一般化し、時間をかけた思考の減少や人間関係の構築の減少が見られる。利便性や即時性を享受しながらも、ふれあいの減少に対して危機感を持つ様子が分かる。

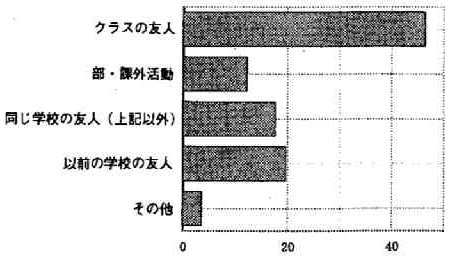
イ　友人とのかかわり

『学校の友達を中心に仲のよいグループを作り、放課後や休日を過ごしている。』（Ｂ２）

Ｂ２　友人・親友の数

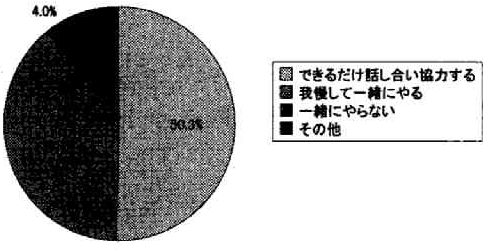


仲のよいグループは



Ａ３　調理実習で考えの違う人と同じ班になったら

円１

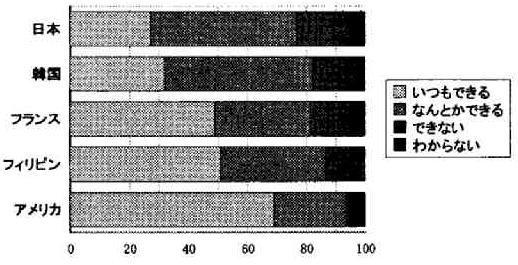


多くの友人との交流はあるが、５人以下の少ない友人と親しくつきあっている。しかし、けんかや議論などは極力避ける傾向が見られる。家庭科の授業内においてグループ活動をする際も、９割がどのようなメンバーでも実習を行う気持ちはあるが、うち４割は考えの違いをそのままにし、あえて歩み寄る行動にはでない。（Ａ３）

海外の青少年との比較でも「自分と異なる考えの人といつもうまくやっていく」という回答は、日本の青年の場合は非常に少ない（Ｃ３）。

少子化・核家族化などで異なる考えを持つ人に接する機会が減少していることが原因とも考えられる。国際化の中で、他国の人々ととのかかわりを深める上でも、コミュニケーション能力の向上は国際人として最も必要なものになると考えられる。

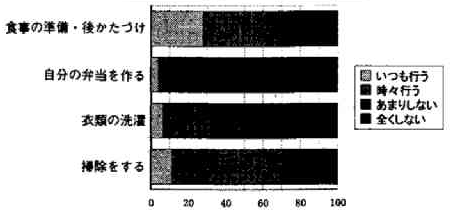
Ｃ３　自分とは違った考えを持っている人とうまくやっていく



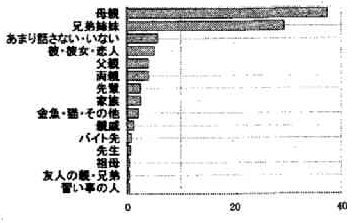
ウ　家族とのかかわり

『家事の実施状況から、家族の一員としての役割分担があまりなされていない。』（Ａ４）

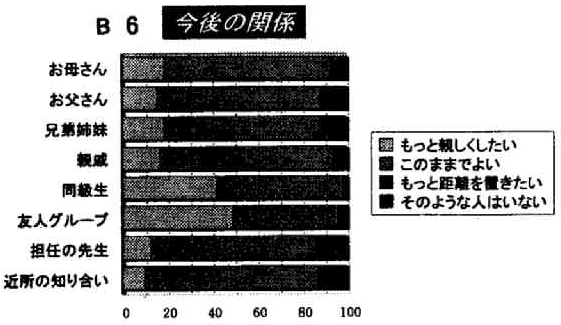
Ａ４　家事をどのくらいやっているか



Ａ５　あなたが、日頃友達以外でよく話をする人は誰ですか（自由記述）



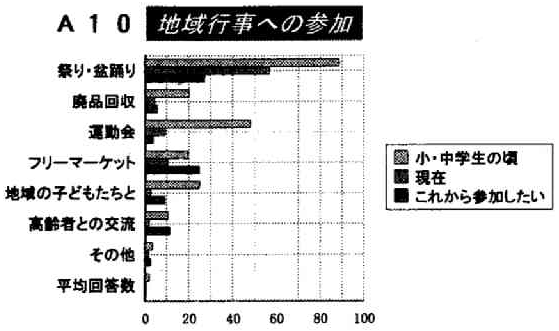
中学時代より通学時間が増え、部活動や塾・アルバイトなどで帰宅時間が遅い「下宿人」のような高校生の実態がうかがえる。このような毎日は、「生活技術」を修得する機会を失わせ、生活者としての自立が遅れる傾向にある。また、同じように帰宅時間の遅い父親とのかかわりは量・質ともに少なく、母親との差は大きい（Ａ５）。しかし、こうした家族との関係を改善していこうとする傾向は少なく、７割が現状維持でよいと考えている。



反面、友人に対しては発達段階の特徴であるが、もっと親密な人間関係を期待する様子がうかがえる（Ｂ６）。

エ　地域とのかかわり

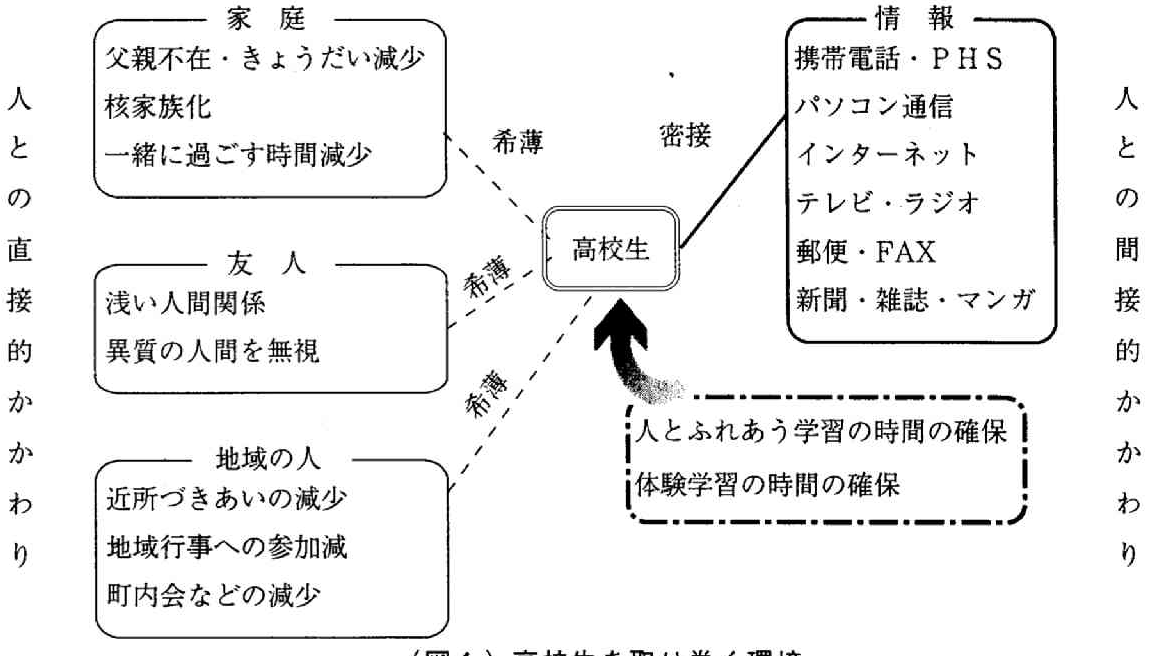
『高齢者や子どもなど異年齢・異世代との交流は少ない。』



高校入学以前は、多くの生徒が地域の行事に参加している（A10）。本年度より、東京都においても、小・中・高等学校が連携した「トライ＆チャレンジふれあい月間」として、保育園見学などの地域との取り組みを進めている。

しかし、高校入学後は異年齢との交流やリサイクル活動等への参加が減少している。また、地域周辺の施設については、日頃自分に必要なものには認知度が高いが、その他の施設については関心が薄い。少子・高齢社会の問題についての知識は多く持っているが、地域での自然なふれあいやボランティア活動などの行動が伴っていないのが現状である。地域の行事への参加が、本研究の調査からは高校入学後はそれ以前の半分になり、その後もあまり関心を示さない様子がうかがえる。学校教育が地域と協力した学習を取り入れることは、今後も期待されることと考える。

高校生を取り巻く環境については、下図のようにまとめた。



（図１）高校生を取り巻く環境

(4) 調査のまとめ

調査B『高校生の他者感覚』(ベネッセコーポレーション)の序章で、深谷昌志東京成徳短期大学教授は、「これから先はかつてのように『細やかな人間関係は期待せず、自分のペースを保ちながらゆるやかな人間関係』を結ぶようになると思われる」と述べている。

また、青少年白書(平成10年度版)では、希薄な人間関係から起こる青少年の問題行動に対して「求められる対応の基本的方向」の中に以下の項目があげられている。

- 地域に開かれた学校の実践
- 学校における心の教育の必要性
- 自然体験・生活体験の重視
- 学校外での青少年の居場所づくり
- 青少年の国際交流事業の推進

これらをふまえ、小・中・高等学校の連続性のある「家庭や地域での体験を通して人とのかかわりを深める」教科指導について考えていきたい。

2 研究の方向性

「人とのかかわり合いの希薄化」や「体験の不足」は、学校教育においても大きな課題である。

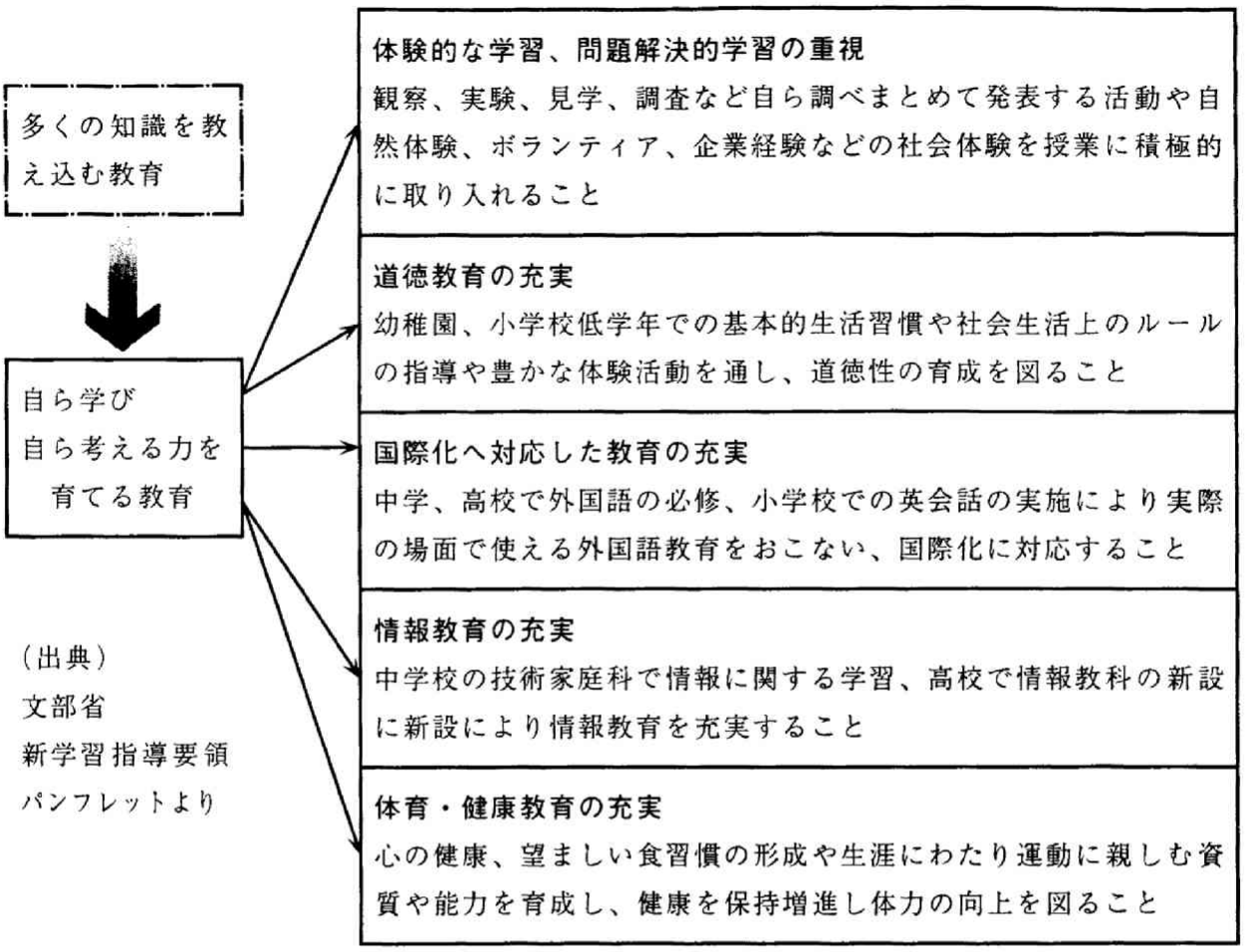
新学習指導要領では、学校教育の目指す方向を、今までの「多くの知識を教え込む教育」から「自ら学び自ら考える力を育てる教育」とし、生涯学習の基礎となる力を養い、自分で考え、自分の考えを持ち、それを自分の言葉で表現できる能力をもつ子どもの育成を課題としている。

高等学校家庭科では、「家庭生活を営むために必要な衣食住や消費生活などに関する知識・技術を総合的に付けさせる」ことを大きな目標としている。家庭生活や社会生活は、人と人とのかかわり、人と物とのかかわり、人と環境とのかかわりを通して営まれているため、様々な場面において、周囲と円滑なかかわりあいをもつことは、生活に潤いを与えてくれる。

また、知識の伝達のみでなくそれを裏付ける体験や経験を積み技術を身につけることは、豊かな生活を築き上げることにつながる。そこで、家庭や地域での体験を通して、人とのかかわりあいを深める家庭科の指導について考えた。

(1) コミュニケーション能力の育成

家族と十分にかかわり、コミュニケーションが活性化することにより、家族の相互理解を深め、家庭生活の充実や家事や育児への配慮ができるようになる。また、友人や地域の人とかかわり、コミュニケーションをとることにより、他人の気持ちが理解でき、自分と相手の気持ちを勘案し、周囲に協調した行動がとれるようになる。しかし、発達した便利な社会に住む現代の子どもたちは、自分に都合の良い環境とは向き合うが、自分に不都合または、関係のない周囲との関係を保とうとする努力をしなくなり、周囲と円滑にコミュニケーションをとることができなくなってきている。以上のような点から、人と触れあう学習の時間を確保し、コミュニケーション能力を育てる指導が今後とも重要になると考えた。



（図２）　これからの学校教育の目指す方向

(2)　体験学習の有効性

平成10年度に小中学生を対象に行った「子どもの体験活動等についてのアンケート調査」からは、小中学生の１日の生活時間の中でテレビやビデオを見る、テレビゲームをする、マンガを読む、学習塾に行くなどに費やす時間が増え、自然体験・生活体験がその父母の時代よりも減少していることがわかる。また、お手伝いをする子、生活体験が豊富な子、自然体験が豊富な子ほど道徳観や正義感が身に付いているという結果もでている。

体験学習はその過程において、それまで頭の中のイメージでしかなかった物事と現実の物事とがどれだけ異なるかを発見することができる。また、自分の身体や気持ちを相手や物に直接接触させることにより、第三者でなく当事者として物事を受け止めることができる。そのような点から、体験学習の時間を確保し、実感を伴った理解を深めることを重視する授業が今後ますます必要となってくる。

以上のことを踏まえて、人とのかかわりを深める体験の機会を重視した授業を行い、本研究を進めることにした。

3　研究の進め方

今回の主題に基いて、具体的に授業を計画するに当り、どのような形で家庭や地域とかかわることができるか、またどのような形で他とのコミュニケーションの機会を増やすことができるかを検討した。

はじめに、普段の授業や学校生活の中で問題として感じていることを出し合い、授業の中に取り込めそうな題材を探した。例えば、実習の班の中で共同作業がうまくできないという状況から、実習以外の授業でもグループでの学習を取り入れることが効果的ではないかと検討したり、学校近隣の苦情例から、公園などの清掃を通じて地域とのかかわりを持つとともにごみの問題を考えることを検討したりした。

同時に、学校の周りの地域の特性を研究し、それを生かした授業の方法を模索した。その際には、周辺の地図を参考に、実際に近隣を歩いてみたり、校内の他教科の教員や他校の実践例を参考にした。

地図を調べると、普段見過ごしていた様々な施設が学校周辺にあることに気付くこともあった。例えば、授産所、保育園、乳児院、老人ホーム、デイケア施設、地域センター、ボランティアセンターなどである。授業への協力が可能かどうか、依頼の方法としては、まず教員が訪問し、受け入れの方法について検討した。また、役所等の担当部署を通じて依頼する方法もある。いずれの方法についても、適切な時期・方法で、学校からの公式依頼が必要である。今回、いくつかの施設にお願いをしたところ、好意的に受け入れを認めてくれるところが多く、有り難かった。また、先方でも地域（高校を含めて）との交流を求めている場合があり、積極的に相談にのってもらえた。

また、学校の近くに適当な施設がない場合、最寄りの地域センター、ボランティアセンター、社会福祉協議会、町内会、老人会などに出向き、資料や情報を得ることもできる。個人やサークルなどの団体を紹介してもらい、協力をお願いできる場合もある。

地域の方々に対してだけでなく、家族とのコミュニケーションのきっかけともなる方法として、今回はインタビューを取りあげた。「授業で扱った内容について保護者の意見を聴く」という課題を出すと生徒から、「久しぶりに両親とじっくり話をした」「父が少子高齢化について、こんなにはっきりとした知識と意見を持っているとは思わなかった」などの感想が多く聞かれた。このような課題が親子のコミュニケーションのきっかけを増やすとともに、授業においても、教室内の意見交換にはなかった立場からの主張を加えることができ、生徒の価値観を形成する際の選択肢を増やすことにもなった。

題材によっては、専門家へのアプローチを検討した。海外の事情を知るために、大使館や留学生会館に問い合わせたり、地域の商店やメーカー・関連の公的機関に出向いた。他教科の教員に授業を参観してもらい、アドバイスを受けることもよい結果を生んだ。

次に、学校外の方や施設に協力を得る場合の交渉方法や事前準備について考えた。今回の研究では、他とのかかわりの持ち方を学ぶ一例として、協力を依頼する交渉段階から生徒自身が主体的にかかわるという方法をとりいれているので、その際の留意点も含む。

まず、教員が交渉に当たるとして、何よりも考慮すべきことのひとつが受け入れ側の事情である。以下に、乳幼児や高齢者のための施設を訪問する場合の例を挙げる。

(1) 見学者の人数や回数に制限がある場合がある。

学級担任など、教科担当以外に引率をお願いしたり、時期を分散できないか、放課後の時間を利用できないか、などを検討する。

(2) 受け入れ側の行事などで訪問できない日や時間帯がある。

食事・昼寝・入浴などの時間帯についても、当日生徒がどのようなかかわり方ができるか、できないことは何かなど、先方とよく話し合う。

(3) 写真などを撮る場合、プライバシー保護のため許可が必要である。

(4) 訪問時の服装として、清潔で動きやすいものを着用するよう指導する。このことについては、打ち合わせの段階で十分詰めておく必要がある。

長い爪、アクセサリーは危険なため厳禁。訪問する生徒の風邪などの健康状態にも注意する。

(5) 訪問時のことばづかいやマナーを指導しておく。

高齢者に対することばづかいが、無礼にならないよう、敬語などの指導も必要である。

(6) 校長から、役所などの担当部署への連絡も必要である。複数の施設に協力を願う場合には必要な手続きである。(指導事例4参照)

(7) 教員があらかじめ交渉した後に、正式に管理職から文書などで依頼する方法もある。

いずれにしても、早めに校長や教頭に報告しておく必要がある。

(8) 生徒に事前交渉からかかわらせる場合、その際のことばづかいやマナー、電話のかけ方、手紙の書き方、訪問の時間帯などの指導が必要である。

いずれの場合にも教員・生徒ともに、先方の生活の場に入りこむということをしっかりと認識することが重要である。

また、今回は各校ともこれまでに交流のなかった相手との接触を新たに求めたが、何年にもわたって交流を続けることにより、相互の信頼関係が築かれ、授業の内容がより充実していくものと思われる。また、今回、実習させていただいた保育園からは、次年度以降も、実習の継続を望む声が寄せられている。

今回の研究では、体験の内容を教室で発表させる機会も重視した。

発表の方法は、それぞれの学校の事情に応じて設定し、プリントなどで発表方法を示したり、生徒の報告を拡大コピーして使ったり、生徒に板書させたりした。また、発表後の質疑応答を活発にするために、あらかじめ質問の準備をさせたケースもある。事前準備の方法としては、どのグループがどのグループに質問するかだけを決めておき、発表がひとつ終わるごとに質問をさせる方法や、発表を聞きながら各自の質問を用紙に記入させ、全部の発表終了後にまとめて答えさせる方法などをとり、いずれも授業の活性化につながった。特に、発表することにあまり慣れていない生徒の場合、ある程度準備が必要であるが、授業実施前の予想以上に生徒は生き生きと動いていた。

昨年度の教育研究員報告でも指摘されていたが、様々な形で積極的に近隣の地域と交流を深めることは、これからの家庭科の大きな課題でもある。教員が各学校をとりまく地域の特色を積極的に研究し、それを生かした授業をつくるよう研究を進めていく必要がある。

Ⅲ　指導事例

1　指導事例１　手紙や被服製作を通して自治会（老人会）との交流を図る

(1)　題材設定の理由

家庭一般における「被服製作」の指導には例年課題が多く、教材の選定や指導方法など最も工夫を要する部分である。その理由は生徒の技術の差が大きいこと、全体的な傾向として、すぐに結果の出ない継続的な作業を嫌う生徒が増えていることなどがあげられる。また現在のように既製服が安く大量に出回っている状況において、被服製作の目標をどこに置くかも大きな問題である。そこで、製作を単に「衣生活」の学習の一部として技術だけをとらえるのではなく、「高齢者の生活と福祉」の内容を受け、地域の老人会の方との交流を図ることを目的としながら、「色彩」や「マナー」といった生活全体の知識を身に付けられる総合的な内容にしたいと考え、この題材を設定した。

(2)　学習目標

ア　高齢者の生活や健康について理解する。

イ　手紙の書き方など、社会生活上のマナーを知る。

ウ　染色や基本的な裁縫の技術を身に付ける。

エ　作品づくりを通して相手の立場を思いやる態度を養う。

(3)　全体計画（15時間）　対象（家庭一般　２学年）

学　習　項　目	時間	学　習　内　容	留　意　点
高齢者の生活と健康 『だれでもいつかは高齢者』	2	高齢社会の現状について知り、高齢者の生活や身体的特徴などからどのような心理になりやすいかを考えてみる。	高齢者が身近にいるか問いかけてみる。 ・VTR『ぼくらはシニア体験団』
高齢者疑似体験 『インスタントシニアになってみよう！』	1	高齢者体験プログラム「インスタントシニア」を体験し、高齢者の身体的機能の変化を実感する。	・インスタントシニア（ゴーグル、耳せん）
『車椅子の介助をしてみよう！』	1	車椅子の構造や動かし方を知り、安全に介助する方法を練習する。	段差、ドアやトイレ、スイッチの高さなどの不便さに気付かせる。
色彩と心理 『カラー自己診断』	2	色紙を用いた心理テストを行い、色彩が人に与える影響を知る。 自分が好きな色、自分に似合う色を探す。（他人の意見との比較）	色彩を上手に生活の中に取り入れていくことをすすめる。
『高齢者と色彩』		インスタントシニアのゴーグルを通して色紙を見てみる。	高齢者に手紙を書く際色彩にも注意する必要があることを伝える。
ステンシル実習 『ステンシルではがきをつくろう！』	3	自分でデザインしたシートや既成のプレートを組み合わせ、目的に応じたはがきを作成する。	・イラスト集 ・ステンシル作品集

手紙の書き方とマナー 『老人会の方へ手紙を出そう！』	1	一般的な挨拶状の書き方と、言葉遣いについて確認する。 暑中見舞い・文化祭の案内・年賀状などの形で文面を考えて書く。	手紙の基本的なマナーも併せて説明する。 老人会の名簿は確認をとってから使用する。
基礎縫い　・手縫い 　　・ミシン	1 1	並み縫い、まつり縫い、ボタン付けの仕方を確認する。 ミシンの扱い方を知り、直線縫いや飾り縫いの仕方を覚える。	実用的な技術であることを再認識させ、確実にできるよう繰り返し練習させる。
小物作り（自由製作） 『文通した方へのプレゼントを作ろう！』	3	はぎれや不要布でできる巾着や、リハビリ用のお手玉、クッションなど、プレゼントする作品を考え製作する。	高齢者の使いやすさを考え、工夫するようにヒントを与える。
プレゼントを渡す 訪問の報告	課外 ＨＲ	希望者で自治会館に作品を届けに行き、機会があれば学校へも訪問してもらえるよう依頼する。 訪問した時の状況や様子をクラスで発表する。	老人会の方が生徒たちをどのように見ているか、話をしてもらう。 参加できなかった生徒にも様子を伝える。

(4)　指導展開例（学習項目：手紙の書き方とマナー　１時間）

①　本時のねらい

ア　手紙の書き方の基本的なマナーを確認する。

イ　目上の人に対する言葉遣いや、高齢者を気遣う言葉を考える。

②　本時の学習の流れ

課題把握

手紙の書き方のマナーを知る

・表書きの文字の位置や大きさを確認する。
・はがきとはがき以外の書き方の比較をする。
・時節の挨拶や敬語の使い方を知る。

課題追求

老人会の方への手紙の内容を考える

・年齢や性別から相手の方を想像する。
・簡単な自己紹介の文章を作る。
・デザインにあった内容であるか確認する。

まとめ

ステンシルをしたはがきに清書する

・絵と文字のバランスを考え、清書する。
・誤字や脱字がないか友だち同士で確認する。

投函する

（生徒の作品例）

③　評価の観点

ア　読みやすい文字で丁寧に、表書きと文面を書くことができたか。

イ　高齢者を思いやる内容の手紙を書くことができたか。

(5)　生徒の感想

『インスタントシニア体験』

・歩くだけで疲れてしまうし、階段がとてもこわいので高齢者はいつも不安な気持ちだと思う。階段には手すりをつけ、できるだけ段差をなくしてほしい。

・足が重く、関節が曲がりづらい。ちょっとした段がすごくじゃま。階段は雨の時はすべりにくくするとか、駅の料金表とかの字を大きくしてわかりやすくするべき。

・明るい性格の人でも、外で歩いたりするのがいやになって内向的になってしまうと思う。

『車椅子の介助』

・車椅子を押してる人もけっこう力がいるなあーと思った。

・自分が車椅子の生活になってしまうのを考えると、最初のうちはすごくストレスがたまってまわりの人にあたってしまうかもしれないと思った。それくらい不便。

・自転車とかほっぽっとかないで、道を広く使えるようにしようと思った。

『小物作り』

・人にあげるものだと緊張する。でもよろこんでくれたらうれしいな。

・けっこうすぐできてよかった。むずかしいのだとやる気なくす。

『自治会館への訪問』

・おじいちゃんとかおばあちゃんとかと話をしたい。でもしつこい話はやだな…。

・いつもゲートボールしてるのか聞いてみたい。

・お手玉の３つのを教えて欲しい。

(6)　考　察

ア　祖父母と同居している生徒とそうでない生徒では、高齢者に対するイメージがかなり違うため、導入に高齢者疑似体験を行ったのは良かったと思う。

イ　インスタントシニアや車椅子体験は、同時にクラス全員で行うことができないため、体験していない生徒の学習内容を明確にしておく必要がある。

ウ　アンケートの結果からも分かるように、生徒たちは普段あまり手紙を書くことがないためか、基本的な表書きの書き方さえ知らない生徒が多い。これから社会に出るためにも、最低限手紙のマナーは覚えておくべきと考える。

エ　被服製作はどうしても個別指導を行う必要があるが、簡単な作品であれば友だちと相談しながらできる生徒の割合も多くなり、互いに知らなかった一面を発見したという声も多く聞かれた。

オ　今後、手紙をきっかけに知り合った老人会の方々と、どのような交流をしていくかが課題である。

2　指導事例２　衣生活と社会のかかわりを知り、自立した衣生活を営む力を身に付ける

(1)　題材設定の理由

「着る」という行為は個人的な行為であるとともに、社会とのかかわりの強い行為である。

近年、被服については、従来の家政学やファッション界からのアプローチのほかに、心理学や哲学などの立場からも研究されている。現代社会における衣生活の課題を次のように考えた。

・新しい素材開発による素材選択の難しさ
・健康と流行のバランス
・不要衣服とゴミの問題と国際交流
・バリアフリーな衣服の必要性
・マスコミで描かれる画一的な高校生像
・高校生の衣服管理に対する希薄な意識

日常、何気なく行っている「着る」ことを改めて振り返り、自らの衣生活を自立して営む力を身に付けるために、本題材を設定した。

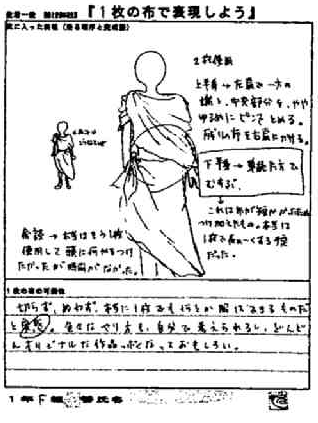
(2)　学習目標

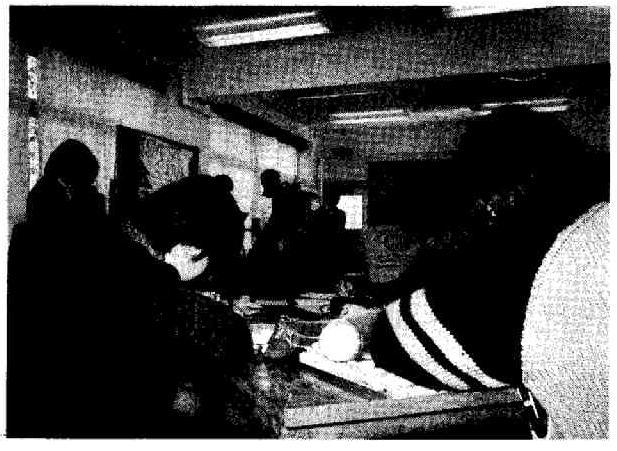
ア　衣服と社会とのつながりを知ることで、自立した衣生活を営む力を身に付ける。
イ　インタビューや実習を通して、友人、家族、地域の人々とのコミュニケーションを深める。
ウ　フィールドワークなどを行うことで問題解決方法を知り、今後の学習に生かす。
エ　学校の特色を生かし、今後の高校生活を有意義に過ごそうとする態度を身に付ける。
オ　自己表現を楽しむ。

(3)　全体計画（22時間）　　対象（生活一般　１学年）

学　習　項　目	時間	学　習　内　容	留　意　点
『着る』ということ	2	日常生活を振り返り衣生活の課題を知る。 衣服の機能を理解する。	衣生活の課題提起を行う ＫＪ法
『服装』と『ジェンダー』 『制服』と『私らしさ』	1 1	男女の社会的地位と服装の関係を知る。 制服の必要性と個性の表現の問題を考える。	VTR『ファッション・ドリーム』 VTR『制服？』
衣生活と自然環境 『暑さ寒さも…』	2	繊維の特徴を知る。 体温調節と着装の関係を知る。	
不要衣服とリサイクル 『もう着ないけれど…』	2	不要衣服調査を行う。 古着の流行と流通について知る。 ボランティア団体への協力－古着を送る。	VTR『ネパールの生活』

衣生活調査 『衣生活なんでも調査団』 （計画）	3 課外	グループ研究の計画を立てる。 服装と社会のつながりを考える。 テーマに沿って家庭・地域の人々へインタビューする。	新聞記事 地図
衣服の手入れ 『とにかくやってみよう』 『ハンディキャップと着脱』	1 1	衣服管理：シャツにアイロンをかける。 半身・指先・目が不自由な場合の衣服の着脱を体験する。 介護する立場・介護される立場で相手の気持ちを理解する。	シャツ・トレーナー等（クラスによりデモンストレーションのみ） ２～３人のグループで互いに体験
『１枚の布で表現しよう』	2	洋服・和服の構成を知る。 １枚の布を巻く・結ぶ・ピンで留める・ひもで縛る・挟むなど。 布の可能性を体験する。	VTR『ファッション・ドリーム』 各種布・着物など
洗剤と環境 『落ちた汚れは…』	3	油から石けんを作る。 洗浄剤の問題点を知る。 環境汚染の加害者とならないための生活感を身につける。	「石けんの素」　廃油 VTR『暮らしの中の不安　合成洗剤』
衣生活調査 『衣生活なんでも調査団』 （まとめ・発表）	4	調査のまとめを行う。 グループごとに発表をする。 結果から自分の衣生活と社会のかかわりを知る。 服装の自由と自治について考える。	模造紙 質問カード





(4)　指導展開例　学習項目　衣生活調査『衣生活なんでも調査団』（計画・まとめ・発表）

①　本時のねらい

調査結果をわかりやすくプレゼンテーションする

各班の発表から、衣生活を営む力を身に付ける

② 本時の学習の流れ

課題把握

衣生活の課題を見つける （授業3時間）

・自分の衣生活と社会のとのつながりを知るための調査を行う
・グループでテーマを決め、課外活動の計画を立てる
・方法は、人とのかかわりを必ず取り入れる

課題追求

課題についての調査研究を行う （課外活動）

・各班のテーマに沿って調査を行う
　インタビュー・アンケート
　家族・地域の人・専門家に聞く

まとめ

調査研究の結果をまとめ、発表する （授業4時間）まとめ・発表

・調査結果の集計・まとめ
・発表準備
　調査結果を模造紙にまとめる・報告集原稿作成
・発表時間（各班7分）
・班ごとに調査結果と考察を発表
　調査目的・調査方法・調査対象・調査費用などの紹介
　調査からわかる衣服と社会のつながり
・発表に対する疑問点・感想をカードに書いて発表者に渡す
・発表者は集まった疑問点・感想に対し答える（各班1分）
・今後の高校生活に調査結果をどのように生かすかを考える

③ 評価の観点

・自ら課題を見つけ、学んだか。
・人とのかかわりのある調査だったか
・調査方法は適当であったか

(5) 生徒の感想

『ハンディキャップと着脱』（右半身が不自由と想定して）

・（自分で着てみて）健康だから、自分はちゃんと着れるからといつも当たり前のように過ごしてきたけど、いざその立場になってみるとひどく大変でつらい思いをしているんだということに気がついた。
・（人に着せると）相手は自分の体じゃないから優しくそーっとするけど、自分は「もっと早く」とか思ってしまった。

『1枚の布で表現しよう』

・この授業でプリントの図に書いてある布の巻き方をやってみたが、図の通りに行かなくてなかなか大変だった。また、ただの布にもいろいろな巻き方があって、表現方法もあるということにとても驚きました。そしてこのような布はビデオでみると洋服よりも変化があってとても美しいと思った。
・頭にも巻けるし、スカートにもなるし、つける場所を選ばない。どこにでも使える。

衣生活調査『服装なんでも調査団』

・私たちは民族服ということで『大使館』に電話をしました。それでわかったのは大使館に質問しても答えてもらえないということです。実際は、『観光局』というところに質問をしたり、民族服を借りたりしました。(民族衣装をテーマにした生徒の感想)

・ネパールの衣服事情を知って、「ほしいからといってなんでも買い、使えない、飽きたからといって捨てたりすること」を今になって反省します。(衣類を海外へ送るボランティアについて調査した生徒)

・どのユニフォームにもポリエステルはかかせないようだ。意外に綿が少ないことがわかった。調査でインタビューを取り入れることはとてもいい方法だということがわかった。(スポーツウエアの素材について体育の先生にインタビューした生徒)

(6) 考　察

「課題追求のために自ら行動すること」「生徒同士のコミュニケーション（肌の接触・言葉のやりとり)」「衣生活の自立」に重点を置いた授業を行った。

新学習指導要領では「介護体験」が重視され、とかくハウツーを学ぶと考えられがちであるが、本来の意味は、相手の気持ちを理解することが目標であると考える。そのような視点から、『とにかくやってみよう』では、互いに衣服を着せる脱がせるという実習を行った。生徒たちは、普段より大きい衣服が必要であることや、あわせが逆になることでボタンがかけにくいこと、指先が麻痺した場合のオープンファスナーのはめにくさなど、なかなか鋭い指摘があった。また精神的には、思い通りにならないのでいらいらしたり、相手に気を使うあまり疲れてしまったりと、互いの気持ちを理解するという目的は達せられたと思う。この体験を発展させて、高校生の目で、高齢者や身障者の衣服への工夫（衣服のユニバーサルデザイン）を提案してみたいと思う。

衣生活領域の実習というとこれまで「製作」が中心であった。しかし、生徒の生活技術が低下し、製作に時間がかかる、日常に衣服の製作がほとんど必要がないなどから、なかなか成果が得られず指導者が悩むことが多い。「ものづくりの大切さ」は十分理解しながらも、被服製作をためらいがちにもなる。そこで、『1枚の布で表現しよう』では、様々な大きさの布を体に巻き付けることで服装表現を行った。生徒は1時間の実習でも、様々な着方を自由に表現していた。

『衣生活なんでも調査団』のテーマを選択するに当たって、参考までに授業で取り上げた事柄を一覧にまとめて生徒に提示した。そのため、生徒はその中から特に手近なテーマを選択してしまい、同じようなものが多くなってしまった。「生徒が自ら課題を見つける」ための援助の難しさを感じた。さらに、調査対象が同世代の偏りがちで、ここでも異年齢との交流を避ける傾向が見られた。しかし、大使館や留学生会館に問い合わせる、学校説明会に来た中学生や保護者にインタビューする、テーマに関連する地域の商店に話を聞きに行くなど、積極的な活動を行った生徒もいた。また、生徒が活動をするにあたっては、交通費、通信費（電話、ファックス、インターネット使用等）やコピー代、レンタル費用（送料、クリーニング費用）などの予算を公費に組み込む点や、コピー機やプレゼンテーションのための施設の充実が必要である。

今後「総合的な視点」立った教科の学習活動として様々な試みを行っていきたい。

3　指導事例３　家庭や地域のごみ問題を考える

(1)　題材設定の理由

高度経済成長以降の豊かな消費生活は、ごみの増加をもたらし、環境ホルモンやダイオキシンの発生、埋め立て地の不足、資源やエネルギーの無駄遣い等、現在も多くの問題を抱えている。

高校生の学校でのごみの捨て方をみると、捨ててしまった後は自分とは無関係で、その後のごみ処理については関知せず、家庭でのごみの捨て方も意識していないようである。また、利用している地域の商店・飲食店等から大量に出されたごみの処理についても、理解していないような状況がある。

ごみに関する問題は、テレビや新聞からの情報としてインプットされているが、それが自分の生活と密接に関係している事実であり、それに対して何をすべきかがわからず、生活の中でほとんど実践されていないという状況がある。頭の中の情報でしかないごみの問題について、自分の足で歩き、聞くという体験を通して実感を伴った理解をすることが必要であると考えた。

そこで、居住している地域の家庭ごみの分別の方法や出し方を調査したり、普段は客として利用している店でのごみ処理についてのインタビュー調査を行って、ごみをどのように捨てねばならないか、どのように処理されるか、その実態を知り、ごみを減らす生活、ごみを再生利用する生活を実践することができるよう、本題材を設定した。

(2)　学習目標

ア　家庭から出るごみの分別方法とその処理の実態を知る。

イ　商店や飲食店、学校、清掃局などで働く身近な地域の人々との交流を通して、地域のごみ処理の実態を知る。

ウ　ごみを分別する、減らす、再利用する態度を身に付ける。

(3)　全体計画　（６時間）　対象　（家庭一般　１学年）

学　習　項　目	時間	学　習　内　容	留　意　点
ごみの増加にともなう問題点	1	アンケートによりごみについての各自の理解度を知る。 ゴミ増加に伴う問題点を把握する。	ごみについてのアンケートを行う。 新聞記事、公報等関連資料を紹介する。
地域のごみ処理調査の目的と計画作成	1	調査目的と方法の理解 調査班の作成 班毎の実行計画の作成	訪問時の心得を指導する。
地域のごみ処理調査の実施	課外	訪問先と事前に連絡をとり、訪問先と訪問日時を決定する。 訪問先でのインタビュー調査を行う。（ごみ処理の方法・費用・問題点等について）	訪問先と時間を確認する。

地域のごみ処理調査の発表準備	課外	調査結果をレポートにまとめる。 発表原稿を作成する。	事前に生徒の発表レポートを拡大コピーする。
地域のごみ処理調査の発表	2	班毎に調査結果を発表する。 発表について質疑応答する。 発表のまとめをする。	発表内容はメモをとらせ、質疑応答で生徒達に対話をさせる。
家庭ごみの分別調査	課外	自分の住んでいる地域の家庭ごみの分別方法を各自調査してレポートにまとめる。	ごみの分別レポートを集める。
家庭ごみの処理方法	1	分別された家庭ごみがどのように処理されるのかを知る。	ごみのゆくえをプリントにして配布する。
ごみの問題のまとめ	1	家庭や地域社会がごみ処理や、その問題点にどのように取り組んでいるか理解する。 自分自身がどのように対応したらよいのかを考える。	

(4) 指導展開例　(学習項目　地域のゴミ処理調査の発表　2時間)

① 本時のねらい

生徒が生徒同士または家族や地域の人達との交流を通してごみについて調査し、聞いた内容を、聞き手に分かるように伝える。また、発表者と聞き手の対話が生まれるように授業を実施する。

② 本時の学習の流れ

課題把握

本時の学習目標を知る。

・地域のごみ処理調査の目的を再度認識する。
・発表の目的と方法を理解する。

課題追求

発表と質疑応答をする。

(事例)
・個人商店のごみ処理について。
・スーパーマーケットのごみ処理について。
・コンビニエンスストアのごみ処理について。
・ファーストフード店のごみ処理について。
・ファミリーレストランのごみ処理について。
・学校のごみ処理について。

・清掃局の見学結果について。
・リサイクルショップの見学結果について。
・外国のごみ処理についての調査発表。

まとめ

地域のごみ処理についてまとめる

・発表のまとめ
・事業系ごみの処理を理解する。
・次の学習内容を知る。

③　評価の観点

ア　地域の人との交流が十分にできたか。
イ　地域のごみ処理についての実態や課題が理解できたか。
ウ　発表の準備や発表に臨む態度はよいか。
エ　生徒間の対話ができたか。

④　生徒の感想

『調査発表学習について』

・お店の人と親しくなった。
・グループでの調査はつらかった。
・発表によって、みんながどんなことを思ったのかがわかってよかった。
・ごみのことを清掃局の人が、詳しく教えてくれたのでよかった。この課外学習はとても楽しかったです。
・みんなしっかり調べてきていたので、自分たちももっとがんばってくればよかった。
・このような授業は初めてです。普段の授業よりは楽しかったです。
・緊張した。心配だったが、自分なりに発表できたと思う。

『調査内容について』

・（あるファーストフード店でごみ減量のために使い捨てでない容器に変えたことに対し）この調査をしなければ、店内で出されたグラスやマグカップになにも感じたりはしなかったと思うし、無意識であるとはいえ、燃えるごみの中にビニール製の包装紙を捨てている自分を見直すこともできなかったと思います。面倒だといって何もしなければ、何も変わらないことがわかりました。少しずつでもごみの問題に取り組んでいけば良い方向にむかってゆくと思います。
・ファミリーレストランでごみだけで１ヶ月13万円もかかることにびっくりしました。最近はお客さんのマナーも悪くなって、ごみの分別がしにくくなっているという話を聞いて、客として私たちはマナーを守らなきゃいけないんだなあと思いました。
・今までごみが多すぎることは知っていたが、あまり考えたことはなかった。ごみからくる公害には騒ぐくせに、ごみを減らす努力をしていない人が多いように思う。自分の身

の回りのごみを捨ててしまうと、ごみがなくなったと思うけど、そうではなく、少し離れた所に小さくなって集まっているだけなのです。だから、私たちは物を大切にして、ごみを減らしていくべきなのです。

(5) 考　察

ア　調査のためのインタビューの時間は、平均で10分から15分ぐらいだった。2～3分しか話を聞けなかったところもあったが、30分以上も丁寧に応対してくれたところもあり、普段かかわりのない違う世代の人たちとの交流ができた。

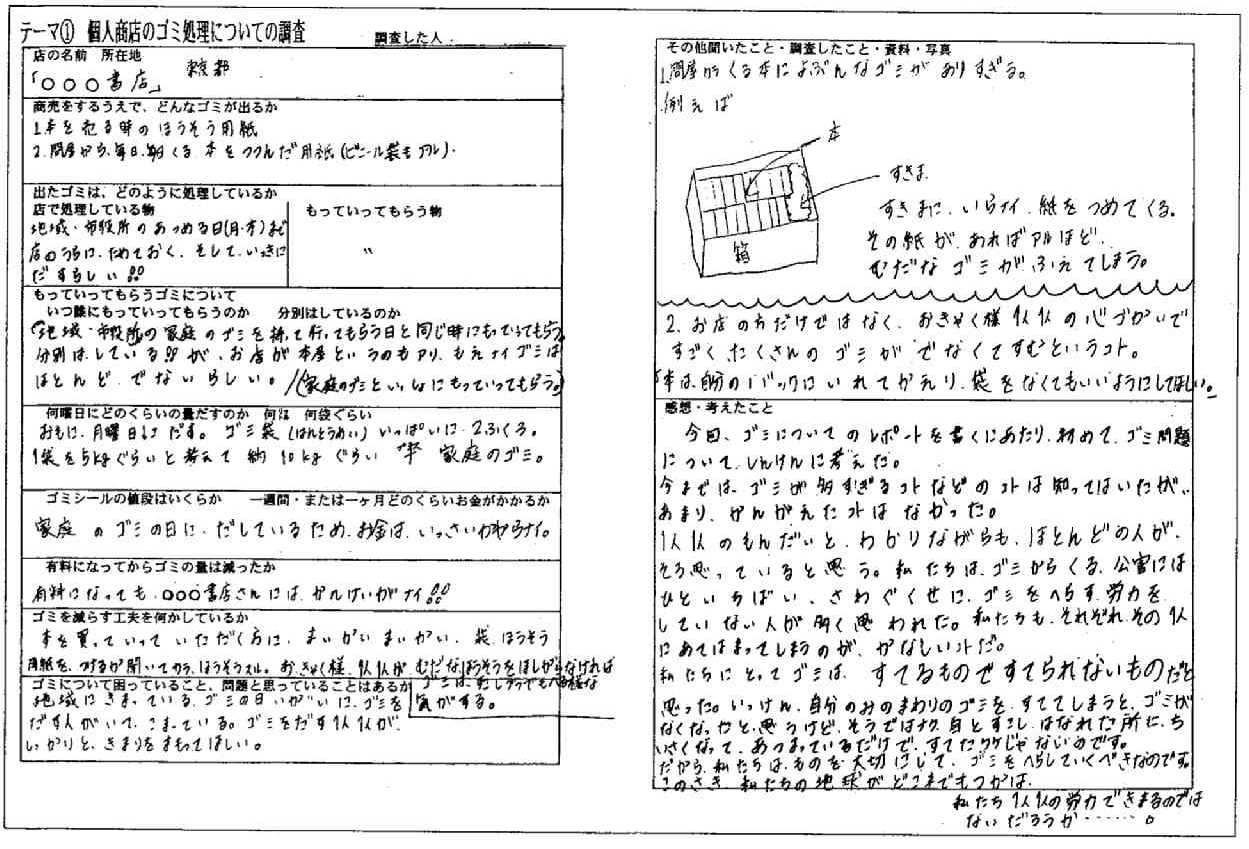
イ　班で調査したことについては、ほとんどの班が協力できたと感じると同時にやりがいも感じていた。自分で行動して発表することにより、やり遂げた満足感をもち、受け身でなく実感をともなった理解に結びついたようである。

ウ　調査の計画や実施・まとめはほとんど課外活動であったが、当初予想していた以上に生徒の活動が活発で、発表の準備や態度がよかった。

エ　発表時の質疑応答において、発表する生徒と聞く生徒との会話を期待したが、活発な意見交換ができなかった。多くの生徒が気軽に発言できるような授業を今後実践したいと考えた。

オ　調査を通して、普段は客として利用している身近な商店や飲食店のごみ処理に関する知識や問題点が理解でき、今後自分が何をすべきかについて考えることができた。

（生徒のワークシート記入例）


テーマ① 個人商店のゴミ処理についての調査　調査した人：

店の名前　所在地
「○○○書店」　穀都

商売をするうえで、どんなゴミが出るか
1.本を売る時のほうそう用紙
2.問屋から、毎日、朝くる本をつつんだ用紙（ビニール袋もアル）。

出たゴミは、どのように処理しているか
店で処理している物：地域・町内会のあつめる日（月・木）まで店の方は、ためておく。もしていきにだすらしい!!
もっていってもらう物：〃

もっていってもらうゴミについて
いつ誰にもっていってもらうのか　分別はしているのか
地域・町内会の家庭のゴミを持って行ってもらう日と同じ時にもっていってもらう。分別はしている!!が、お店が本屋というのもアリ、もえないゴミはほとんどでないらしい。/家庭のゴミといっしょにもっていってもらう。

何曜日にどのくらいの量だすのか　何は　何袋ぐらい
おもに、月曜日にだす。ゴミ袋（ほれとうめい）いっぱいに2ふくろ。1袋を5kgぐらいと考えて　約10kgぐらい　家庭のゴミ。

ゴミシールの値段はいくらか　一週間・または一ヶ月どのくらいお金がかかるか
家庭のゴミの日に、だしているため、お金は、いっさいかからない。

有料になってからゴミの量は減ったか
有料になっても、○○○書店さんには、がんばいがない!!

ゴミを減らす工夫を何かしているか
本を買っていっていただく方に、まいがい、まいがい、袋、ほうそう用紙を、つかうが聞いてから、ほうそうする。おきゃく様、個人がむだなほうそうをほしがらなければ

ゴミについて困っていること、問題と思っていることはあるか
地域にきまっている、ゴミの日いがいに、ゴミをだす人がいて、きまっている。ゴミをだす個人がいかりと、きまりをまもってほしい。
ゴミは、もしかすると、その様な気がする。

その他聞いたこと・調査したこと・資料・写真
1.問屋からくる本によぶんなゴミがありすぎる。
例えば

2.お店のわだけではなく、おきゃく様個人の心づかいで、すごくたくさんのゴミがでなくてすむというコト。
本は、朝のトバックはいれてかえり、袋をなくてもいいようにしてほしい。

感想・考えたこと
今回、ゴミについてのレポートを書くにあたり、初めて、ゴミ問題について、しんけんに考えた。
今までは、ゴミが多すぎるコトなどのコトは知ってはいたが、あまり、がんがえたコトはなかった。
個人個人のもんだいと、わかりながらも、ほとんどの人が、そう思っていると思う。私たちは、ゴミからくる、公害にはひとにちばい、さわぐくせに、ゴミをへらす、努力をしていない人が多く思われた。私たちも、それぞれ、その個人にあてはまってしまうのが、かなしいコトだ。
私たちにとってゴミは、すてるものですてられないものだと思った。いっけん、自分のおのまわりのゴミを、すててしまうと、ゴミがなくなったと、思うけど、そうではナク、自とすこし、はなれた所に、ちいさくなって、あつまっているだけで、すてたワケじゃないのです。
だから、私たちは、物を大切にして、ゴミをへらしていくべきなのです。
このさき、私たちの地球がどうまでもつかは、私たち個人個人の努力できまるのではないだろうか……。

4　指導事例４　保育園実習を通して地域との交流を深める

(1)　題材設定の理由

きょうだいの数の減少や少子化の影響で子どもと接する機会のほとんどない高校生が多い。コミュニケーションに関する実態調査のアンケート結果からも、年少者とはほとんどコミュニケーションをとる機会がないということがわかる。

小学校や中学校で保育園見学を実施している学校もあるが、やがて家庭を築き、父親・母親になる生徒が高校時代に小さな子どもたちとふれあう機会をもつことは、大きな意味がある。保育の学習をただ知識の習得だけに終わらせることなく、体験的な学習をすることにより、異世代の子どもたちの理解を一層深めることができる。

本校の位置している地域は、子育て中の若い世代の家族が多く、学校周辺に11の区立の保育園が点在している。この11の保育園の協力を得て、生徒が自ら計画をたて、実習する自主的な学習を行い、地域との交流を深め、子どもたちと共感し合える心、思いやる心を育てていきたいと思い、本題材を設定した。

(2)　学習目標

ア　子どもたちと共感し合える心　思いやる心を学ぶ。

イ　計画の立案、事前打ち合わせ、実習を通して、自主性を身に付ける。

ウ　保育の重要性を学ぶ。

（事前打ち合わせ・活動記録の生徒記入例）

事前打ち合わせ

10月　9日　（土）　登園時間　3時　55分　退園時間　4時　50分

園の方針（指導目標）
・よく食べ、よく眠り、よく遊ぶ子供
・自分の気もちが出せる子供
・相手のことを思える子供
・親にかわって大事に育てたい
・保護者の方にこの保育園にあずけて良かったと思われるような所にしたい。

見学を希望する日時、何日間、クラス、見学の目標等
希望する日時 -- 10/23.25.26
何日間 - 3日間
クラス - 2人ずつになって ○, △は0・1・2才児, □, X は3・4・5才児の世話をする。
目標 - 幼児の身体的・精神的発達, 幼児が同じ世代の子と遊ぶ時の接し方, 異世代の人と遊ぶ時の接し方の違いを見る。言葉の発達のおくれ子, 早い子などそれぞれの個人差を見る。

園側からの諸注意
4人一組のクラスにしないでください。
人見しりをするのでパニックになる。
体調が悪い時は来ないで。(園児にうつってしまうから)
自分のタオル, うわばき, 外ばきなどを持参する。

決定事項	○・△	□・X	
23日	0才児	3才児	・・・9:30～1:00まで
24日	1才児	4 〃	3:30～4:00－5:30
26日	2才児	5 〃	

活動記録

10月　23日　（土）　(1日目)　登園時間　9時　30分　退園時間　1時　00分

活動記録　土日翌日は園児がいないので1・2才児, 3・4・5才児が合体。
〈室内遊び〉1＆2才児－手まごと＆ブロック遊び＆お人形遊びetc…
3・4・5才児・・絵本＆手まごと＆ブロック＆工作etc…
〈散歩〉10:30～11:00（約40分間）※気候によって時間帯がちがう。
1＆2才児－小学校へ行った。動物園にエサを与えたり, 砂場で遊んだり, 小さな山に登ったり…。
3・4・5才児－近所の池に行ってアヒルを見たり, 公園でいろんな遊びをした。
散歩から帰ってお昼ごはんを食べ, その後お昼寝。

学習内容・感想
土日翌日ということでいろんな学年の幼児が一緒になり, 少し大変でした。でもその反面, 少人数だったので1人1人と接する事ができて良かったです。はじめは突然現れた私たちに人見しりをしてとまどっていたけれど, 保母さんから「子供たちと同じ目線に座って接して下さい」とアドバイスをもらってさっそく実行してみるとじょじょにみんなよっついてきてくれました。お昼ごはんの時は年令によってスプーンやフォークを使うのと, しはしを使うのに別れていてなるほど, って思いました。やっぱりみんなはお散歩が好きなようでとてもよろこんでいて可愛かったです。園児を寝かしつけたところで1日目の実習を終えました。

備考
緊張したけど楽しかったです。

(3) 全体計画（10時間）対象（家庭一般　2学年）

学習項目	時間	学習内容	留意点
乳幼児を知る 保育の重要性を理解する	4	乳幼児の精神的身体的発達を知る 「さくらんぼ坊や」のビデオを見て知識を深める	年齢による発達の違いを認識させる
保育園見学の目的 計画作成	2	1～4人のグループを作る 前時の授業内容をもとに保育園見学の目的を考える 希望する見学日時、年齢を相談する	グループの人数は4名以上になるべくしない 1園に1グループとし人数の偏りがないようにさせる 見学の目的をはっきりさせる
事前打ち合わせ	課外活動	自分たちの希望と園側の都合で見学実習日を決定する 園の指導目標見学実習にあたっての注意事項などを知る	打ち合わせの日時をグループごとに園側と連絡をとらせる グループ全員が打ち合わせに参加する
保育園見学実習		見学実習を行う 時間は平日は放課後3：30～ 第2第4土は9：00～ グループにより1～4日間	見学実習には体操着に着替える 上履き、運動靴を持参する
見学内容のまとめ	2	グループごとに発表内容を検討する	グループごとの特色を発表内容にいれる
見学の成果の発表 まとめ	2	グループごとに発表する 他のグループが体験してきた内容を聞く 保育の重要性を知る	グループの全員が発表する

保育園との交渉は下記のように行った

① 区の児童青少年課へ相談の上、体験学習依頼の公文書を郵送した。

② 区児童青少年課長から各保育園長へ体験学習受け入れの依頼の文書が流された。

③ 月1回行われる園長の月例会で校長から依頼してもらった。

④ 区より11の保育園すべての体験学習受け入れの連絡を受けた。

⑤ 体験学習の日程、人数等については当該園と直接打ち合わせをすることになった。

(4) **指導展開例（学習項目：見学成果の発表とまとめ　2時間）**

① 本時のねらい

ア　グループで体験してきたことを発表する。

イ　自分と異なる体験をしてきたグループの発表を聞く。

ウ　保育の重要性を知る。

② 本時の学習の流れ

課題把握

体験学習の記録から発表内容を確認する

・個人の体験学習の記録をもとに発表内容を確認する。

課題追求

発表の準備をする

・保育園ごとに発表内容を簡潔に板書する。

・保育園での写真をホワイトボードに貼る。

各グループが発表をする

・はじめに、拡大した地図を使って保育園の場所を示す。

（1グループの発表時間は5分とする）

・発表を聞き、感想を一言ずつ記録し、疑問点があれば、質問する。

まとめ

体験学習の感想、問題点をまとめて記録する

・保育をする上で何が大切なのか考える。

(5) **評価の観点**

ア　体験学習が計画をたてて実施できたか。

イ　乳幼児との接し方が理解できたか。

ウ　相手にわかりやすく発表できたか。

(6) **考　察**

ア　今回実習した保育園は、いずれも本校から自転車で15分以内で行くことができる。生徒の9割以上が自転車通学なのでこのような形式の体験学習ができた。生徒の実態や学校周辺の情報に詳しいことが、この実習の鍵であるといえる。

イ　見学実習が放課後、休日であったが全員の生徒が体験学習をすることができた。

ウ　教員の引率なしの見学実習で生徒がトラブルを起こさないかという心配はあったが、無事実習を終えることができた。保育園の先生方の事前打ち合わせでのご指導、見学実習時の温かなご指導のおかげであると思う。

エ　授業外の時間の体験学習だったので見学実習の日時を決定するのは容易だった。

オ　保育園側が体験学習にとても協力的で、普段の保育園の生活の中へ自然体で生徒を受け入れてくれた。

カ　体験学習は1日から4日間と生徒の自主性にまかせた。1日だけの班から4日間通い続けた班もあった。日数が少なくても充実した見学、実習をしてきた班もあり、さまざまな体験学習ができた。

(7)　**生徒の感想**

ア　授業外に行うことがいやだったが、体験学習はとても楽しかった。またやりたい。

イ　事前の話し合いの日程を決める電話をする時は緊張した。しかし、実際に行ってみると先生方がとても親切に教えてくれ、子どもたちもなついてくれ安心した。

ウ　長いようで短い嵐のように、たいへんな3日間だったがとてもよい経験ができた。

エ　各自、保育園見学で学んだことは違っていたようだが保育園実習の写真を見ると、みんな笑顔だった。

オ　僕は今まで人と接することをしなかった。しかも幼い子どもたちというのは何を考えているのかわからなかったので、かかわりたくないというのが本音だった。しかし、大人や同年代の人と接するより子どもたちのほうが接しやすいと気がついた。何も考えずに接してきてくれて自分も何も考えずに接することができる気がした。子どもたちとは不思議なものだと感じた。子どもたちが「かわいい」といわれる理由もなんとなくわかる気がする。

カ　保育園に行く前は0歳児が一番楽だと思っていたが、0歳児は言葉が全く通じないので予想とは逆に、一番つらかった。

キ　自分ははじめ保育園児をなめてかかっていた。その結果、力が結構あるので6～7人で囲まれるとけっこうな痛手をくらうことが何度かあった。

ク　1歳児は人のまねをしたがって、先生の後についてまわっていた。言葉もまねをしつつ覚えていくのだと感心した。どこの保育園でも子どもと同じ目線で子どもの気持ちになって接するとあったが、実際そうすることによって小さな子に近づけたような気がする。

ケ　保育園の先生の大変さと子どもたちとのつきあい方の難しさを実感した。4・5歳児は自分の言いたいことが言えるから、1～3歳児より楽だろうと思ったが、実際は言葉をしっかり理解して話すことができるから難しいと思った。

コ　園児にとって一年という時間は大きい。1歳違うだけで全然違うことがわかった。

(8)　**保育園側の感想**

ア　小中の体験学習を受け入れたことがあるが、高校生はいろいろな面で違うと思った。

イ　保育園がどんな所なのか広く知ってもらいたい。

ウ　仕事を持たない母子も見学に来てほしい。

エ　最近の母親の中には親としての自覚がないまま、子育てをしている人が多くなっていると感じる。どこで親としての教育を受けるのか、ということを常に感じている。

オ　男子生徒が来てくれたことで園児は興奮ぎみであった。保母にとっても園児にとっても刺激があってよかった。

カ　園児の生活を知ってもらうためには、1日来てほしかった。

キ　少人数での実習であれば、来年以降も受け入れてもよい。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

本年度の教育研究員は「家庭や地域での体験を通して、人とのかかわり合いを深める家庭科の指導」を主題に、体験学習やグループ作業をすることにより、円滑な人間関係がもてる子どもを育てていくための指導方法の研究を行った。人間関係が希薄になっているといわれる現代の高校生がコミュニケーション能力を高め、地域との関係を深めていくためには、意図的に体験学習を多く取り入れたり、コミュニケーションを図る機会を作ることが必要であると考えた。

そこで、学校周辺の施設の協力を得て、幼児や高齢者との交流を取り入れた学習を行った。また、グループ学習は調査するだけにとどまらず、インタビューを通して、家族、友人、地域の人々との関係を深めることを重視した。

指導事例１では、普段あまり接触のない高齢者の生活や健康について、手紙を通した交流をきっかけに理解を深めることができた。生徒たちは、高齢者に直接話しかけることには抵抗があっても、手紙であればゆっくり相手のことを考えて書くことが可能である。相手を理解する場合も何度も読み返せるという利点があり、コミュニケーション手段としての手紙の重要性を再確認したようである。また、これをきっかけに今度は直接話をしたいという生徒が多く見られ、今後への課題となった。

指導事例２では、衣服の社会的機能を理解することを中心に実験・実習を試みた。衣服をものとして見るのではなく、コミュニケーションの手段としての存在に注目した。そこで、衣服を媒介にして生徒同士のかかわりがもてる実習を取り入れた。また、衣生活の現状を学ぶために、できるだけ校外へ、また家族や地域の専門家という異年齢の人から知識を得るように指導した。今後は、「総合的な学習の時間」も視野に入れ、衣生活を多角的に学ぶ授業展開を考えていきたいと思う。

指導事例３では、家庭や地域でごみ処理についてのインタビュー調査を行って、現状や問題点を知り、対策を考えさせることができた。生徒は、家族との対話、地域の人との交流、班のメンバーとの話し合いや協力を体験することにより、自ら学習をやり遂げた満足感をもち、学習内容を深めることができた。

指導事例４では、少人数のグループを作り、班ごとに保育園と交渉し体験学習を行った。近隣にこれだけ多くの保育園があることを知らなかった生徒が多く、地域への関心を持つことができた。はじめて保育園に行った時は、かなり緊張していたようだが、どの班もうまく保育園の先生や園児とコミュニケーションとることができた。事後の保育園からの感想でも好意的な意見が多かった。しかし、一度に多くの生徒の受け入れは難しいので、その点が今後の課題である。

これらの実践を通して、日頃会話の少ない家庭で親子のコミュニケーションをとったり、異なる考えの人と意見を交換したり、地域の人に目を向けるきっかけができた。生徒の興味関心を生かした題材を取り上げるには、学校内だけでは限界がある。それには、家庭や地域の協力を得る必要がある。今後も、それぞれの学校の地域の特性を生かした学習方法を検討していきたい。

また、開かれた学校づくりを進めるために、家庭や地域との連携を深め、交流することを家庭科の授業の中で積極的に取り入れていきたい。